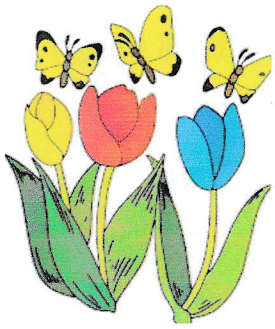
1A

さいたま市シニアユニバーシティ東浦和校
第６期校友会

校友会だより



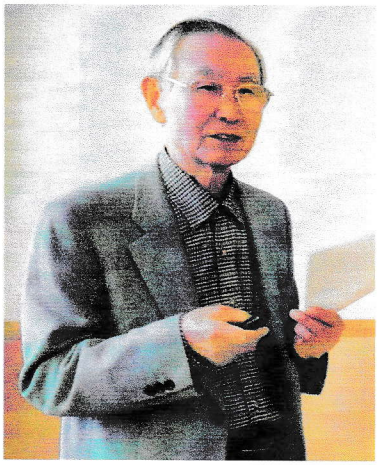
令和２年３月４日　第135号

講演会：城の話「基本知識と現存12天守のある城」（担当５班）

語り：大久保満男氏（504）

日　時：令和２年２月14日（金）　13:30～15:40

場　所：仲本荘　　出席者：38名



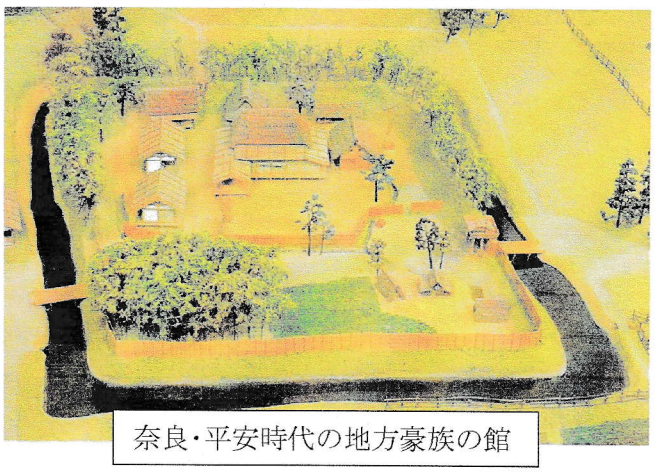
２月度の学習は城の講演で、５班の大久保満男氏が、城が時代ごとに変遷した様子から、城郭（縄張り）に在る構造物の城特有の用語などの説明と、城の門から濠（堀）や石垣に建物（櫓・天守）の構造・装飾・内部などの見方と、江戸時代からの天守閣が現存する12の城の紹介があり、城を観光する場合の着眼を心得える講演であった。

「城の歴史」

城の原型は、紀元前数百年前の弥生時代から、稲作など穀物の耕作が始まった時期に部族が定着して集落の社会が形成され、耕作した作物などを集積貯蔵し、部族と財産を外敵から守るために堀や柵で囲んだ**環濠集落が起源**で、集落・部族の支配者の館や防御の砦から、後に地方の豪族・武将・藩主・大名の防御の要塞として進化し、江戸時代の中期になると戦がなくなり、城は権威と威厳の象徴として美的感覚も考慮した荘厳な城が築かれて行った。

現在我々がイメージする城は、石垣や濠・堀で囲まれ、門と櫓に天守などの構造物があり、これらは室町時代の末期から起きた戦国時代（1467年からの応仁の乱～1600年の関ケ原の合戦～1615年の大坂城夏の陣で落城までの時代）に、各地に武将が出現して領国の防衛と更に拡大を図るための防衛と戦闘拠点として築城されたものである。

尚、弥生時代から飛鳥時代を経て奈良時代・平安時代に在った環濠集落の館・砦・陣屋跡と、戦国時代に築かれた城を含めて全て城と称して、全国に約２万～３万ヶ所あると言われ、埼玉県には城が116ヶ所、館と砦に陣屋が198ヶ所存在し、さいたま市には城が７ヶ所、館と陣屋が13ヶ所存在している。

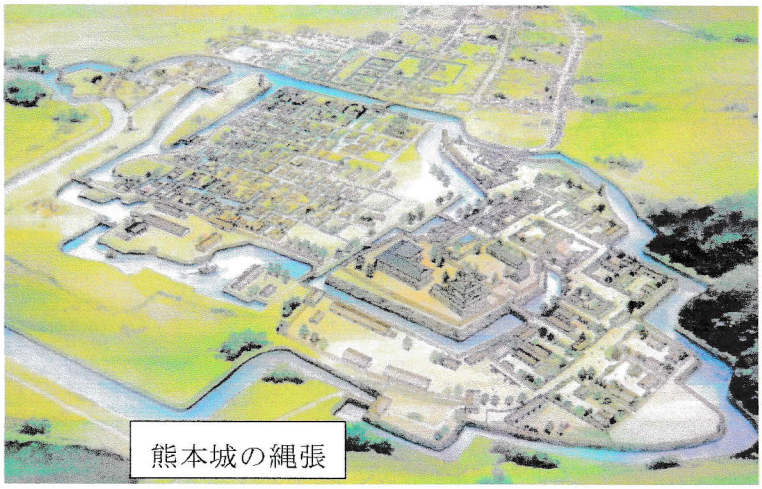


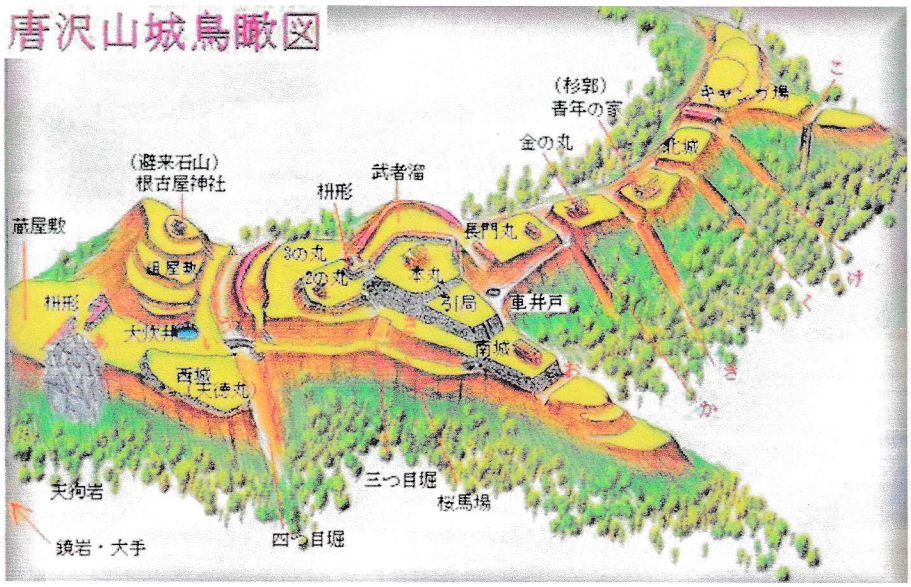
奈良・平安時代の地方豪族の館

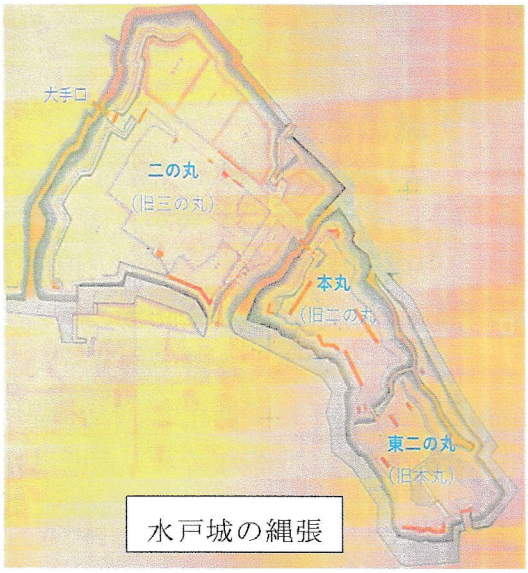
「城郭（縄張）」

人類は古来、自分が所有する土地の境界線に縄を張るなどで定め所有権を決めているが、このことが「縄張」の語源である。

城の「縄張」とは、城郭の設計のことを指し、本丸・二の丸・三の丸などの曲輪（くるわ）をどう配置するか、防御のための門（虎口（こぐち））・櫓・濠・堀や土塁などの配置の城全体像の設計を「縄張」と云う。


熊本城の縄張





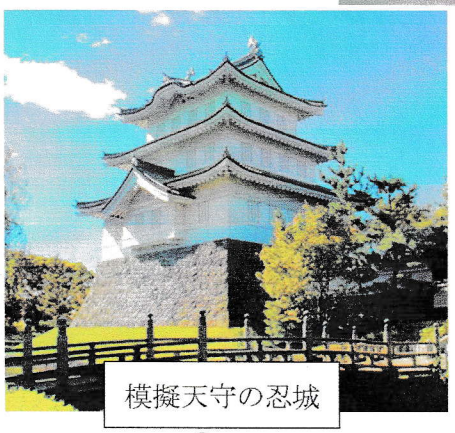
水戸城の縄張

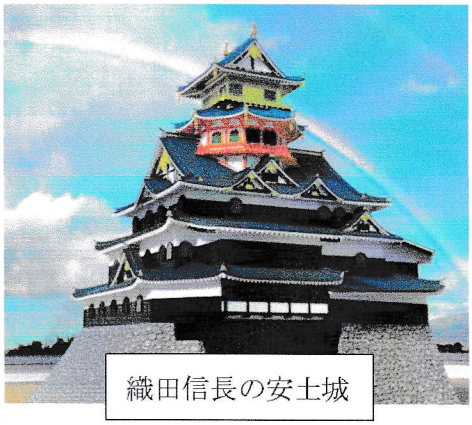
「天守閣」

日本全体で、江戸時代からの**現存天守**がある城は12城存在しているが、消失後現代に元の姿に復元した名古屋城・熊本城などの**復元天守**が14城、創作して復興した大坂城・小田原城などの**復興天守**が13城、天守はなかった、または別の場所に模擬して建てた忍城などの**模擬天守**が52城、熱海城など天守風の**観光施設**が25ヶ所ある。

復元天守の名古屋城

復興天守の小田原城


模擬天守の忍城

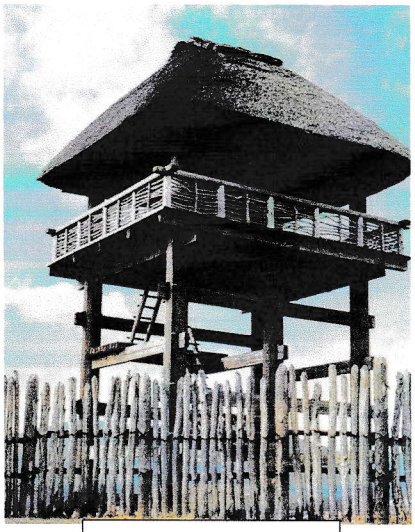

織田信長の安土城

「櫓」

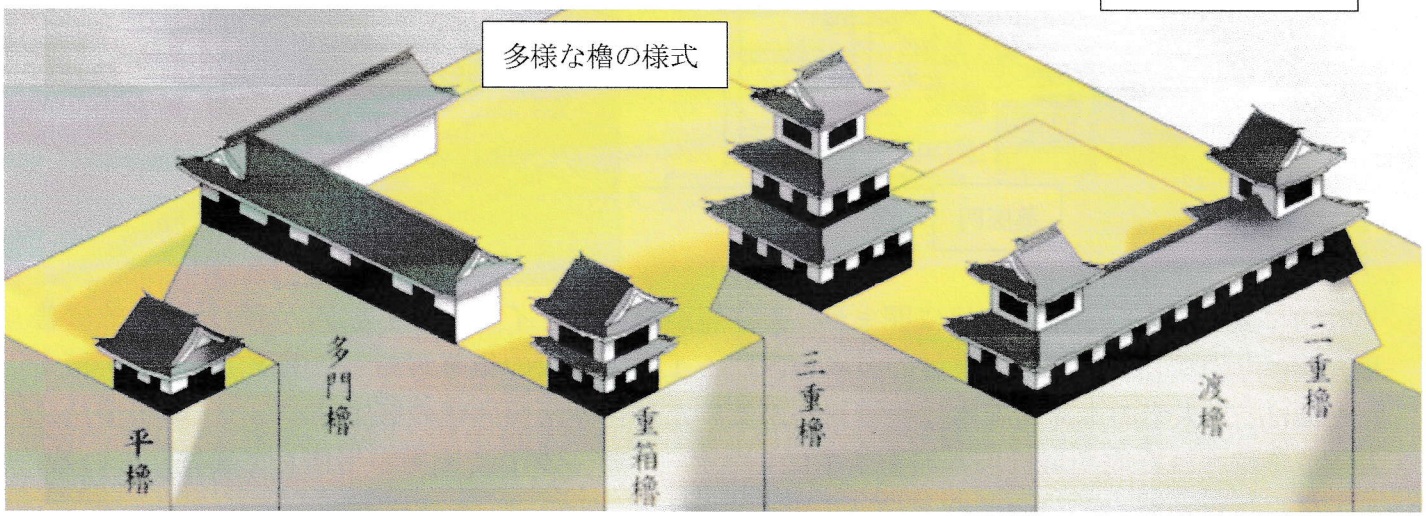
櫓は、城郭内の隅に防御や物見のために建てられた建築物で、石垣や土塁の上に建てて、敵の攻め手への攻撃と防御を目的にして、通常の窓のほかに攻撃用の小規模な開口を複数箇所設けてある。

また、本来の天守が火災などで消失した場合、弘前城の本丸御三重櫓、江戸城の富士見櫓が代用天守として使われた。矢倉・矢蔵とも読まれ、武器庫の役割にも使われていた。

櫓には、形によって三重櫓・二重櫓・平櫓・渡櫓・多門櫓などがあり、用途によって見張りをする物見櫓・時を告げる太鼓櫓・鐘櫓・接待用に月見櫓・富士見櫓、井戸櫓・食糧櫓などがあり、方位によって東・西・南・北に、丑寅(東北)・辰巳(東南)・未申(南西)・戌亥(北西)などに称され、姫路城はア・イ・ウ・エ・オなどで称している。



櫓の原型(物見櫓)



「門(虎口)」

門は、城に限らず一般住宅や寺院でもあるが、城の門は出入口としての役割のほかに、攻め寄せる敵を阻む防御の役割もあるため様々なバリエーションがある。

城郭の正面口である大手虎口(こぐち)の門を「大手門・追手門」と称し、城郭の裏口にあたる搦手(からめて)口の門を「搦手門」と称しており、また、方位の東・西・南・北で称する門もある。

冠木門(かぶきもん)は、屋根が無く、二本の柱に開閉する扉を付けた門の原型で、古代からの様式である。

高麗門(こうらいもん)は、高麗時代の朝鮮から伝わった門で背面が特徴的で、切妻屋根を持ち、さらに門の後ろ(内側)に控柱を立てて、その上に小屋根がある。

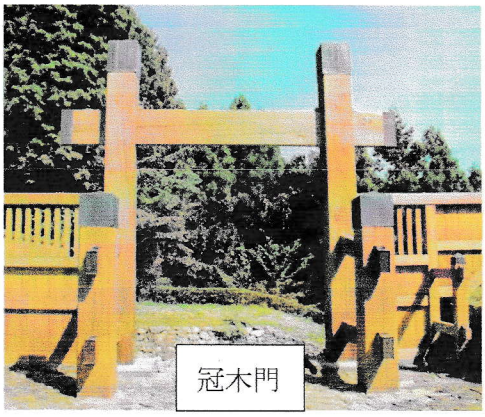
薬医門(やくいもん)は、6本の親柱を持ち、主柱から控え柱までを取り込む切妻屋根の端を突き出させているのが特徴の門で、公家や武家屋敷の正門としても使われたほか、医家の門としても使われたことからこの名称がついている。

櫓門(やぐらもん)は、石垣に挟まれた門の上に長屋状の建物(多聞櫓・渡櫓)を設けた様式で、大手枡形虎口などの重要な場所に設置された堅固な門で、中央に両開きの大きな扉を設けており、櫓には武器が格納され、敵の侵入の際には敵を射る防衛の門である。

長屋門(ながやもん)は、長屋の中間部を門としたもので、武家屋敷をはじめとする豪族の館によく見られる。

埋門(うずめもん)は、石垣の下部をくり抜いたようにして造られた門で、敵の侵入時には石垣などで埋めて通行できないようにする。

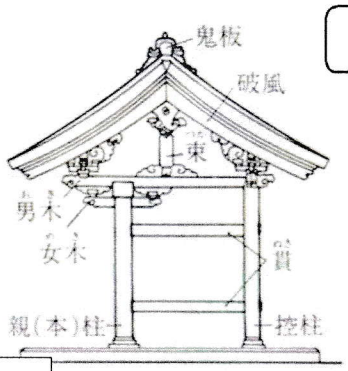
枡形虎口(ますがたこぐち)は、城の重要な場所には門を二重に組み合わせた枡形虎口を採用している。虎口とは曲輪の出入り口を意味し、枡形は、米・油を計量する四角の枡の形に似ていることに由来した二重の門の空間を枡形と称し、最初の門が高麗門で次の門が櫓門になっている。

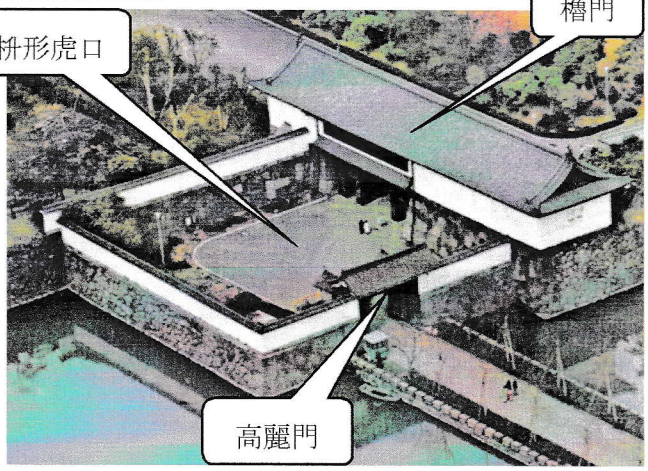

冠木門

高麗門

櫓門

薬医門





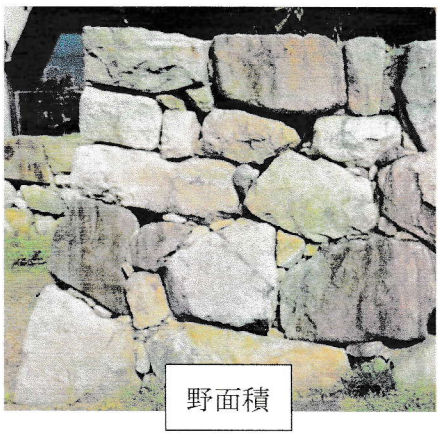
「石垣」

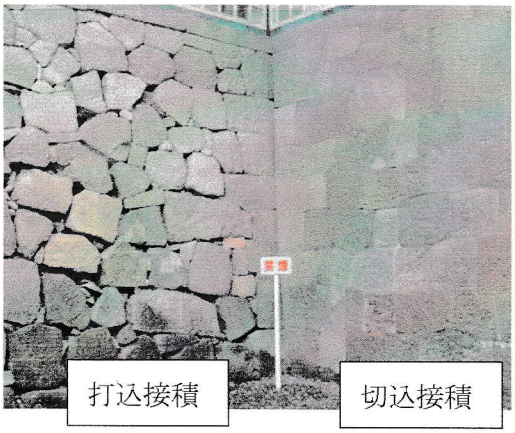
一般的に城と言えば、堀と石垣に囲まれ、天守閣があってとイメージするが、石垣が本格的に普及を開始したのは、比叡山の東麓の坂本地区に石工の穴太(あのう)衆の集落があった関係で、石垣が積まれた城は、穴太衆の本拠の坂本に明智光秀が築いた琵琶湖南西湖畔の坂本城からで、織田信長によって築城された安土城は坂本城を手本にしスケールアップして光秀が指揮して築城している。

石垣自体は、飛鳥時代の朝鮮式山城の頃から使われてはいたが、土塁を強化するために補助的に使ったのがほとんどで、城を守るために高い石垣を本格的に使ったのは信長・秀吉の安土桃山時代からである。

石垣は積み方によって自然石を積む野面(のずら)積、空間に小石を打ち込む打込接(うちこみはぎ)積、豆腐の加工した切込接(きりこみはぎ)積、コーナー部は算木(さんぎ)積みの４つに大別でき、接(はぎ)とは石と石との接合のことで、積み石の接合部分の形状を表している。

算木積　打込接積


野面積


打込接積　切込接積

今後の学習予定～

4月　3日(金)　10:00～　「令和２年度定期総会」　　場所：浦和CC　9階15集会室

5月13日(水)　課外学習「くすりミュージアム」見学　集合：上野駅中央改札口　12:30